

苦學の光

中五

荒木経明

北風凜烈として皮膚を劈き紛らざる花は空中に舞ひ  
萬山寂として聲なき如月も天運こゝに新りて山野漸く  
春色を帯び恰も自然の有聲を敷けるが如く禽鳥はその  
妙音を弄して耳目の達する所吾人をして爽快をさけば  
しめざるはな無し嗚呼實に天然の意匠謝するに餘りあ  
りと云ふべし。 柳も誰か冬を喜んで春を好まざる者  
あらん然ると雖も是れ天運の循環四季は變化にして嚴  
寒措を墜すの日を過ぐしに氷らざれば百花懶慢たる春  
時に遇ふべからず吾人は學に志すも亦然り吾人の進路  
には幾多の艱難辛苦横はれり蛟龍の躍るが如き峻岨あ  
り怒濤の巨岩を碎く如き激流あり然れども能く堅忍不  
拔の精神と苦戰奮闘の精神とを以て自ら之と戦ひ苦み

苦の難を越へ而して花爛熳たる樂園に遊逸するの光榮  
を得よ有り富者の子は貧者の苦を知らずまねぬからに  
象意の有福ふの象徒小育てらぬ夢寢の間に學の道を迷  
ふ身と臥薪嘗膽の苦を積りて日夜積雪の苦を積りて同  
に斗粟せし身と如何に後者の學小所前者に及はず其磨  
く所又如かゝらずといはく此等る后者の學の多く活躍せ  
るを見よなり嗚呼苦學の前途には赫々たる希望と偉大  
なる月桂冠とは伴へり笑に苦學は後日樂園に遊ぶ一步  
也されは吾人にして疾く目的の彼岸に達し以て天下の  
翹楚と成り赫々たる高名を擧せに盡れ無極の光榮を得  
んと欲せるは宜しく春風に微笑む梅花の先づ凜烈たる  
朝風の寒に堪えたるものなることを想はさるへからず  
艱難汝を玉にすの古語遂に吾人を欺かざるなり。

嗚呼吾人宗教家たる青年よこれより有為の大を抱き將  
に來らんとする二十世紀の經營者たる我々豈に能く  
日夜扶掖勉して有為の宗教家と成らすして可ならん  
や。

病弟慰問の狀

中一勝見賢察

吹く秋風は木々の錦を翻へして其後の御容体如何に  
其や好きなきテニス、ベニスも出来ず樂喫き病床に呻吟せ  
らるる事嘆かんと推察はり其為し得べくは毎日に繪  
はがきを送りて慰め申さんとはい思へとも如何せん學科  
は才時不許特に昨今は少々講ふる事ありて心ならず  
も疎音に打過し其行平悪からずや下度矣過日父  
上よりの御書信にも漸次狀方に向へりと有りし故私に